
雷神の女装

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雷神の女装

【Nコード】

N9849E

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

ふとしたことからミヨツルニルを奪われてしまったトール。何とかそれを取り返そうとするがここでとんでもない事態に。豪傑神トールの愉快なお話です。

第一章

雷神の女装

北欧の神々の一人にトールという神がいる。雷と豊穡、それに冠婚葬祭を司る神でありその心は粗暴だがそれでいて実に心優しく実直な神である。

質素な身なりをした筋骨隆々の大男でその厳しい顔にある黒い目は雷神のそれに相応しく輝かんばかりの強烈な光を放っている。顔中赤い濃い髭だらけであり髪も多い。神々の中で随一の戦士でありその鎚ミヨツルニルを手に巨人達を倒していく。人間の守護者でもあり神々の英雄でもある。そんな神だった。

トールの武器はそのミヨツルニルである。これこそが彼の強さの象徴であり巨人達にとつては恐怖そのものであった。この恐怖を巨人の誰かが取り除いてしまいたいと考えるのも道理である。何しろ彼等にしてもそうおいそれと倒されるわけにはいかなかったからだ。それである日巨人族の王の一人であるスリムが動いたのであった。

「つまりだ。あのミヨツルニルをわし等が持てばいいのだ」

「馬鹿な、わし等であのミヨツルニルは扱えぬぞ」

「その通りだ」

そのスリムと同じ存在である巨人族の王達がスリムの言葉を聞いて口々に言ってきた。しかしスリムはその少しずるそうな顔にある濃い黄金色の髭を歪ませて言うのであった。

「何、要はあの男の手にミヨツルニルがなければいいのだ」

「それだけか」

「左様、それだけだ」

そのことを強調するのだった。トールの手にミヨツルニルがなければそれでいいと。

「それだけなら問題はあるまい。わし等が使う必要もない」

「確かにそうだ」

「それはな」

これには彼の同僚である王達も頷いた。言われてみればその通りであった。

「では後はだ。ヴァルホルに忍び込んで」

「ミヨツルニルを盗むと」

「ばれてもあれだ。奴等が受け入れられない要求を出せばいい」

スリムはそう言ってまたずるそうに笑ってみせた。

「例えばフレイヤを妻に寄越せとかな」

「ほう、フレイヤをか。それは面白い」

「奴等は絶対にそれを受けないな」

「というよりかはあの女の方が受けまい。それこそ話を聞いただけで怒り狂うぞ」

「まっただ」

フレイヤは美と愛の女神である。とてつもなく美しい姿をしているが神々の女戦士でもあり猛々しい怒りを見せることでも知られているのだ。このことは彼等もよく知っているのである。

「ではそれで行くでしょう」

「うむ。吉報を期待しているぞ」

こうしてスリムは霧に化けてヴァルホルへ向かった。しかしそれを遠くから見ている一羽の鷹がいた。鷹は巨人の世界であるヨトウンヘイムを出るとすぐに人の姿になった。だがそれは人ではなかった。金色の見事な髪を短く刈りアイスブルーの目を持つ男だった。均整の取れた身体をしておりその顔立ちには細面で目がやや暗い感じはするが鼻は高く口元は微笑んでおり肌も白く美男子であると言っていた。彼の名はロキという。巨人族の血を引きながらも神々に属しており技術や悪戯といったものを司っている。神々でも屈指の知恵者と言われている。

そのロキが話の一部始終を見ていたのだ。だが彼はここですぐにトールにこのことを知らせはしなかった。まずは本来の姿に戻ったうえでゆっくとヴァルホルに戻りだしたのだ。

「急ぐとかえって面白くない」

「楽しげに笑いながらの言葉だった。」

「それよりもこのまま待つていれば」

その笑みに何処か邪悪なものさえ漂わせてきた。

「トールの奴がどれだけ怒るか見ものだ。わしが動くのはそれからでいいな」

こう考えつつヴァルホルにあえてゆつくりと戻るのだった。果たしてロキがヴァルホルに戻ると。トールがヴァルホル中をえらい勢いで走り回っていた。

「ないぞ、ないぞ」

神々の屋敷という屋敷、ヴァルホルにある河という河、穴という穴を覗いて必死に探し回っている。大柄なのにその動きはかなり素早いものだ。

「何処にもない。何処にあるのだ」

「おいおいトール」

ロキはさりげなくを装ってトールに声をかける。内心は笑顔だったが表では神妙な気遣う顔だ。

「一体どうしたんだい？そんなに焦って」

「これが焦らずにいられるか」

トールはそのロキに顔を向けて厳しい顔を顰めさせて言ってきた。「俺のミヨツルニルがなくなったのだ」

「ミヨツルニルをかい？あんたまた飲み食いしている時に一緒に飲み込んだんじゃないのかい？」

トールは大食漢であり大酒飲みである。それをからかっているのだ。

「馬鹿を言え。幾ら俺でもミヨツルニルは食わんぞ」

「それもそうだな。しかしじゃあ一体何処に」

「それがわからんから探しているのだ」

「厳しい顔でまたロキに述べる。」

「果たして何処にあるのか。俺のミヨツルニル」

「ああ、そういえばだ」

「ここでロキは芝居の第二段階に入ることにした。

「ちよつと小耳に挟んだんだがな」

「んっ！？何だ」

身を乗り出してそのうえ耳を近付けてきた。手を耳に当ててさえている。

「ミヨツルニルに関する話か？」

「巨人族の王でスリムっていうのがいるだろ」

「あの狡賢い男か」

トールはスリムの名を聞いてすぐにこう答えた。

「知っているぞ。次にミヨツルニルの餌食にしてやろうと思っ
た」

「じゃあ多分そいつだな。そのスリムは随分といい鎚を手に入れた
そうだな」

「鎚か」

「持つところが小さくて誰にも操ることはできないがそれでもとび
きり硬いらしい」

「間違いないぞ」

トールはそこまで聞いて思わず声をあげた。

「そいつだ、間違いない」

「そうだな。ではスリムのところを調べてみるとしよう」

既に全部わかっていたがここでも芝居をするロキであった。

「わしが調べ終わるまで少し待っていてくれ。いいな」

「うむ、頼むぞ」

こうしてロキは数日時間を置いた。もう全部わかっているの
の間は何もしなかった。それで数日自分の館で適当に時間を潰した
後でトールのところに参上した。そのうえでミヨツルニルのことを
全て話したのだった。

「そうか、やはりスリムがか」

「あと返して欲しかったらフレイヤを妻として差し出せとまで言っ

ているぞ」

「それは流石に無理だろう」

トールはロキの今の言葉に一言で答えた。彼もフレイヤの気性については嫌という程知っているのだ。

「それこそあいつ、ヴァルホルが壊れてしまっ程怒るぞ」

「だろう？それはわかるよな」

「わかるからこそ無理だと言っているのだ」

言っトールも少し怒っている感じだった。髭だらけの顔にあるその黒い目が眩く光っている。

第二章

「そんなことはな」

「しかし向こうは本当にフレイヤを差し出さなければ納得せんぞ」

ロキは真顔を装ってこう言うのだった。

「絶対にな」

「しかし。ミヨツルニル自体を奪われている」

トールは難しい顔になってこのことを述べた。

「巨人共を素手で倒してやってもいいのだがな」

「ああ、それには及ばぬさ」

ロキはここで笑みを作って言ってみせた。

「そこまではな。することはない」

「そこまでというところ」

実はトールとロキは長い付き合いだ。一緒に旅をしたことも何度かある。案外馬の合う二人であるのだ。

「今回も何か知恵があるのだな」

「わしの頭が御前さんを困らせたことがあるかい？」

「あるではないか」

トールは嘘はつかない。だからここでもきつぱりと言い切った。

「何度も俺に悪戯をしてくれたな。女房の髪の毛を全部刈り取ったこともあったしな」

「ほんの出来心だ、忘れてくれ」

「まあいい。それでだ」

トールはまた言う。

「その策とは何なのだ？」

「うむ、向こうはフレイヤでなければ納得せぬ」

「そうだな」

これはよくわかる。トールもロキの言葉に身を乗り出して頷く。
「それだけは確かだ」

「だからだ。フレイヤを連れて行くのだよ」

「それはできないのだろう?」

「トールはいぶかしむ顔でロキに言い返した。

「それは。俺と御前が連れて行けるものか? 怒り狂ったフレイヤを」

「いや、無理だ。まあ話を聞け」

「うむ」

「フレイヤに化けていくのだよ」

「フレイヤに化ける」

「そう。つまりはだ」

ここでロキの顔が楽しげに笑う。そのうえでトールに対して言うてきた。

「トール、あんたがな」

「俺が?」

「フレイヤになるんだよ」

「俺がフレイヤに!?!」

こう言われても何のことかわからない。最初は首を傾げるばかりだった。

「言っておくが俺は変身だのそうした術は心得ておらんぞ」

「だからだ。変身するのではないんだよ」

「ロキはそれは断る。」

「つまりだ」

「うむ、つまりは」

「また身を乗り出してロキの話を聞く。」

「トール、あんたがな」

「俺が」

「女装して行くのだよ」

「何だと……!!」

それを聞いた瞬間だった。雷が激しく落ちた。しかも何十と。トールの館の内外に落ち轟音を轟かせたのであった。

「馬鹿なことを言え!」

その落雷の音に負けない大きさを怒鳴った。

「この俺が女装だと。ふざけるのも大概にしろ！」

「おいおい、わしはふざけてはいないぞ」

ロキもさる者である。彼もまた神の一人でありしかも悪戯を得意としてそれで何度もトールを怒らせているわけではない。こうした事態にも慣れている。それで平然としてトールを宥めつつ彼に言うのであった。

「これは策略なのだよ」

「策だというのか」

「そうだ。だからフレイヤでなければ駄目なのだ」

「うむ、それはな」

さつきから何度も話していることなのでこれはわかる。

「だからこそ御前さんが化けてだ」

「フレイヤに化けてだな」

「安心しろ、向こうはフレイヤの顔を知らない。いや、知っているもヴェールで顔を隠すからわかりはしないさ」

「ヴェールでか」

「花嫁に化けるのだよ」

ロキはこう言う。

「これならばこちらの姿はわからないしそのうえ怪しまれない。どうだ？」

「そうだな。言われてみればな」

「そしてわしが侍女になつてついて行こう」

ロキは同行することも言った。これは彼のトールへの友情めいた感情から来た言葉だがそれと共にこれから起こる楽しい出来事を是非側で見たいという気持ちも会ったからだ。こうしたところはやはりトリックスターであった。

「わしは女にも変わる」

「そうだったな。御前の変身はな」

彼は何でも姿を変えることができる。変身の術では神々随一なの

だ。

第三章

「だからだ。言葉では何とでも言い繕ってやる。安心しろ」

「御前が一緒に来てくれるのならな」

「ロキが知患者なのはもう承知のことだ。だからトールは頷いた。

「それでよからう。それではだ」

「ああ、行くぞ。まずは格好の準備だ」

「わかった。それにしてもだ」

「ここでトールは言う。全てが決まってから。

「おかしなことになったな」

「世の中は全部おかしいものさ」

「ロキはそんなトールに対して告げた。

「あまり深く考えるな。眠れなくなるだけだぞ」

「ううむ」

何はともあれフレイヤに化けることになった。首飾りはそのフレイヤから借り後は大柄な彼に合わせた服にヴェールを身に着け宝石に指輪で飾った。これで一応は見事な花嫁姿になったのであった。

その格好になったうえで。既に完全な女になりやはり女の衣装を着ているロキに声をかけた。ロキはもう艶かしい美女になっていた。

「これでいいのだな」

「ああ、上出来だ」

「ロキはしれつとして言う。トールの髭は覆いで隠しその上にヴェールをしてある。だからばれる筈もなかった。

「これでいい。まあ大柄なのはどうとでもなるさ」

「こればかりはどうしようもないぞ」

見れば女になったロキとは倍位の差がある。あまりにも違い過ぎている。

「大きさはな」

「だから大きな女もいる。気にするな」

それに対するロキの言葉は平然としたものであった。やはり動じるところはない。

「それはな。では行くぞ」

「わかった」

こうして二人でスリムのところに向かった。道中はさしても問題もなく程なくしてスリムの宮殿の前まで来た。宮殿はやけに巨大なものだった。

「また随分と大きいな」

「まあ巨人のものだからな」

トールもロキも元々は巨人族だがそんなことはあまり考えてはいなかった。

「それも当然さ」

「そうだな。それではだ」

「ああ、ここからが本番だぞ」

トールを見上げて笑いながら声をかける。やはり艶かしい女の顔と声だ。しかし中身は紛れもなくロキなので。トールはその女を見てもどうも思わなかった。

「いいな」

「わかつている。ではな」

「あの」

女になりきって宮殿の門のところまで来て衛兵達に声をかける。

衛兵達も言うまでもなく泣く巨人族でありその手に巨大な剣を持って鎧と兜で武装している。トールは彼等を見て思うのだ。

「ミヨツルニルさえ手に戻れば」

怒れる目でこう。

「あんな連中は皆殺しだ」

実際にその手に戻ればそうするだけだった。そのつもりで待っていた。程なくしてロキが戻って来て彼に対して言ってきた。

「もう旦那が待っているそうだが」

「そのスリムがだな」

「ああ、行くか」

「そうだな。行くでしょう」

「一言言っておくな」

「何だ？」

ここで言ってきたロキに対して顔を向ける。

「御前はあまり喋らないようにな」

「ばれるからか」

「そうだ。ばれたらどうしようもないからな」

そこを強調するロキだった。

「だからだ。喋ったりしないようにな」

「わかった。じゃあ俺は動かないでおくか」

「下手に動いたら何もかも終わりだからな」

「わかった。それではな」

「行くぞ」

こうして二人はスリムの宮殿に入った。宮殿の中は壮麗というよりは巨大だった。造りはどれも大きいものでやはり巨人のものだと思わせる。といっても二人もまた巨人族の血を引いているのでこれにはあまり驚いてはいなかった。

「質素なものだな」

「そうだな」

トールは侍女として後ろを進むロキに対して答えた。

「別にどうということはないか。ただ」

「ただ。何だ？」

「広いな」

彼から見てもそうなのだった。

「この宮殿は。かなり」

「広さが好みなのか」

「そうだろうな。まあそんなことはどうでもいいな」

そのうえで話をここで終わらせた。

第四章

「結局のところはな」

「そうだな。ミヨツルニルさえ戻れば」

トールは言う。

「この宮殿にいる巨人共は一人残らずミヨツルニルにより砕かれる」
「もうそのつもりなんだな」

「そうでなくて何なんだ」

彼はきつぱりと言い切つて見せた。廊下を進みながら。

「ミヨツルニルは何の為にある？」

「巨人を倒す為だな」

「冠婚葬祭の清めの為でもあるがな。やはりそれだ」

「そうか。それじゃあ」

「機会があれば動くぞ」

彼は言う。

「その時は動いていいな」

「その時には何も言わないさ」

ロキもそれはいいとした。

「好きにやればいいさ」

「御前は何もしないのか」

「わしが動いたらかえって邪魔だろ？」

ロキは笑つてトールに対して告げた。

「違うか？」

「まあそうだな」

トールもそれは認めるのだった。彼は基本的に一人で戦う主義だ。だからそれはいいとしたのだ。

「それはな」

「そういうことだな。わしは頭脳労働に徹するとしよう」

「うむ。ではな」

こうして役割も分担させいざ婚礼の場に挑む。婚礼の場は宮殿の大広間で行われそこには巨人族の名だたる王や英雄達が集まっていた。その中には言うまでもなく主賓であるスリムもいたのだった。彼は着飾りその場にいた。テーブルの上には山海の珍味や美酒がうず高く積みまれていた。その御馳走や客達を前にしてスリムは如何にも好色そうな顔で二人に声をかけてきたのであった。

「おお、よく来られた」

「本当にフレイヤが来るとはな」

「まさかとは思ったが」

彼等にとつては流石にそうなるとは思わないことだった。まさかフレイヤが来るとは思わなかったのだ。

「フレイヤの後ろにいるのは」

「やけに美人だが」

「侍女です」

ロキはにこやかに笑って巨人達に答えた。

「フレイヤ様についてこちらに来ました」

「そうなのか」

「はい、ですから御安心下さい」

「ふむ、フレイヤもいいがな」

彼等はロキの美貌にも惚れ惚れしていたのだった。やはり彼等も好色そうな笑みを浮かべてロキを見ていた。ロキの正体に気付くことなく。

「では早速祝宴としよう」

スリムが一同に告げた。こうして二人も花嫁の席とその横につき祝宴となった。ここでトールが化けているフレイヤは驚くべき行動に出た。

何と牡牛を一頭丸ごと、鮭八尾、それに蜜酒を三樽瞬く間にたいらげてしまったのだ。巨人といえどこれは驚くべきことだった。スリムも目を皿のようにさせて驚いていた。

「何ということだ」

驚きは声にもはつきりと出ていた。

「わしはこんなになんで食った花嫁を見たことはないぞ」

(ふむ。この程度ならな)

本来ならこれではおぼろげなところだがロキは冷静だった。トールの大食と大酒はよく知っていたのでここは簡単に言い繕うのだった。

「フレイヤ様はですね」

「うむ、フレイヤは」

スリムはロキの言葉を聞くのだった。既にここで彼の術中にはまっていた。

「貴方様を恋焦がれて八日の間殆ど何も召し上がっていないかったです」

「わしにか」

「はい、そうです」

そう述べると共ににこやかに笑ってしなを作ってみせる。好色な巨人達に合わせるの事だ。

「だからなのですよ」

「そうか。ではそれではな」

スリムはその饒舌をすっかり信じ込んだ。そのうえ気までよくさせた。それで今度はトールのヴェールをあげて顔を覗き込もうとした。だがその瞬間に広大と言ってもいい広間の端まで引いたのであった。怯えきつた顔と共に。

「どうした!？」

「何があつた!」

「み、見よ!」

スリムは腰を抜かしつつ驚愕の声でトールが化けているフレイヤを指差しつつ同胞達に告げた。

「花嫁の目を!」

「!？フレイヤの目をか」

「そうだ、まるで雷がほとぼしり出ているような」

(まあ当然だな)

ロキは彼の言葉を聞いて至極当然のことと納得した。

(雷神なのだから)

「どうということなのだ」

「フレイヤ様はですね」

ここでまたロキは言うのだった。スリムに対して。

「貴方様のことをお慕いして」

「わしをか」

また同じ流れだった。だが彼はロキのその言葉を信じるのだった。

「そうです。八日の間まるで寝ておられないのです」

「左様であつたか」

「ですから目がそうなるのも当然」

こう言い繕うのだった。

「御安心を」

「わかつた。それではな」

「はい、それでは」

「ではスリムよ」

「そろそろではないか？」

巨人達がここでスリムに声をかけてきた。

「うむ、そうだな。祝言をな」

スリムもそれに頷いた。

「では早速ミヨツルニルをここへ」

「はい」

スリムの家臣がそれに応える。

「それではその様に」

「うむ、頼むぞ」

こうしてミヨツルニルが持って来られた。それを見たとールの目の色が変わるがロキがそつと止めた。

第五章

「慌てるなよ」

「うむ」

トールもロキの言葉に頷く。二人は小声になって囁いていた。

「それはな。わかってている」

「ならいい。機会は絶対に来るからな」

「もうすぐな」

「その時だ」

そつとトールの耳元に囁いてみせる。

「思う存分暴れる。いいな」

「喜んでそうさせてもらう」

こつ答えてまた沈黙に入った。その間にスリムは家臣達からあるものを受け取っていた。見ればそれは。

「よし、これだ」

「これで宜しいですね」

「そう、これこそがミヨツルニル」

スリムはその鎚を手にとって言う。

「これをフレイヤの膝の上に乗せるのだ」

「では王よ」

家臣の一人がスリムを王と呼んで声をかけてきた。

「このミヨツルニルをフレイヤの膝の上に乗せ」

「清めとしましょう」

これは北欧の冠婚葬祭の儀礼だ。彼等巨人族もまたこの儀礼を避けることはできない。巨人にも守らなくてはならないものがあるのだ。

それを行う為に今そのミヨツルニルをフレイヤの方に持って行く。そこにいるのがフレイヤではなくトールであることを何一つ知らずに。

「それではだ」

「はい」

侍女であるロキが静かにスリムの言葉に頷く。スリムは今にもミヨツルニルをトールの膝の上に置くこととしている。それを見つつ頷いていた。

「これを置くぞ」

「御願います」

厳かな雰囲気の中でミヨツルニルが膝の上に置かれていく。そしてミヨツルニルがスリムの手から離れトールの膝の上に完全に置かれた。その時だった。

「今だ！」

「!?!」

スリムが不意に今のトールの声に気付いたその時だった。ミヨツルニルは花嫁の手に奪われ花嫁は忽ちのうちに後ろに飛び退いた。そのうえで花嫁衣裳を脱ぎ捨てかわりに粗野な身なりの大男が姿を現わしたのだった。

「げげっ、貴様は！」

「トール！」

「そう、トールだ！」

自ら威勢よく右手にあるミヨツルニルを高々と掲げつつ名乗りをあげてきた。

「貴様等を倒すトールはここだ！」

「くっ、まさかフレイヤに化けていたのか！」

「何ということだ！」

「まあそういうことなんだよな」

ここで暫く沈黙して座っていた侍女が立ち上がった。そのうえで言うのだった。

「中々手の込んだ演出だったけれどな」

「貴様は一体!?!」

「ただの侍女ではないな」

「ああ、悪いがその通りだ」

まだ美女の姿のまま巨人達に答えてみせる。

「わしの名前はな」

「わしの名前!？」

「トールと共にいるということは。つまり」

「そう、予想通りさ」

彼もまたヴェールを脱ぐ。その瞬間に本来の姿に戻っていた。

「ロキだ。ここに来るのは暫く振りだな」

「くっ、裏切り者がまた一人来たか!」

「よくもおめおめと我等の前に!」

「ええい、黙れ!」

ロキのかわりにトールが彼等に声をかけてきた。

「貴様等の卑劣な謀略は許せん!」

こうスリム達に叫ぶのだった。

「この俺の手で貴様等を倒す!覚悟しろ!」

「おのれ、こうなれば!」

「英雄達よ勇者達よ!」

巨人達は一斉に叫び巨人の戦士達を集める。すぐに広間に戦士達が集う。既に武装している。剣や槍の銀色の煌きが場を輝かせ眩いまでである。

だがそれよりもトールのミヨツルニルの輝きは凄まじいものだった。その輝きは広間はおるか宮殿全体さえ照らしていた。まさに雷の光そのものであった。

「集まって来たか」

「よくもわしをたばかってくれたな」

家臣達に鎧兜を武装させその手に巨大な剣を持ってきたスリムが前に出た。そうして怒らせた目でトールに対して言う。

「雷神トール、覚悟せよ!」

「抜かせ!」

そのスリムにまたしてもトールの大音声が響き渡る。

「俺のミヨツルニルを盗んだ大罪、ここで償ってもらおう！」

「何を！」

「受け取れスリム！」

スリムに向かって突き進む。その右手のミヨツルニルを高々と掲げつつ。

「これが雷神の怒りだ、受けよ！」

「何イツ！」

スリムが最後に見たものは己の顔に近付いてくる長方形の鉄であった。それが視界の全てを遮ってしまった時。彼の頭は雷により完全に吹き飛ばされてしまった。

頭を失ったスリムの身体は暫く立っていた。だがやがてゆっくりと前に倒れそのまま動かなくなった。巨人の王は今ここであえなく倒れた。

「ス、スリム王！」

「何ということだ」

「さあ、次は誰だ」

トールは倒れ伏したスリムの亡骸を尻目に巨人達に対して問う。

「このトールを倒さんとする者はいないのか！」

「言ったな、ならば！」

「この槍で！」

巨人族の英雄達とトールの死闘がはじまった。しかしやはりトールは強かった。ほんの数刻の間に勝負は決し彼はロキを連れて意気揚々とスリムの宮殿を後にしていた。その右手にあるミヨツルニルは眩い雷を漂わせ続けていた。

「気が済んだみたいだね」

「うむ」

誇らしげな顔でロキの言葉に頷く。

「これでな」

「それは何よりだ。それでだ」

「何だ？」

「女装はどうだったい？」

意地悪そうに笑ってトールに対して問うのだった。

「はじめての女装は」

「馬鹿なことを聞くな」

それに対するトールの返事はこうであった。惘然とした顔で答えるのが何よりの証拠だ。

「こんなことは二度とせんぞ」

「そうかい？随分楽しそうだったけれどな」

「ふざけるな。俺はこんな趣味はない」

ムキになってそれを否定する。

「全く。御前の知恵も時としては迷惑だ」

「それはどうも」

「そういえばだ」

ここでトールは気付いた。

「ロキ」

「今度はどうしたんだい？」

「一つ聞きたいことがある」

こう述べてロキに尋ねてきた。

「貴様はどうしてこの話を知ったのだ？」

「この話って？」

「だからだ。スリムがミヨツルニルを盗んだという話だ」

彼はそのことについてロキに問うてきた。

「最初から知っているようだったが。それはどうしてだ？」

「それか」

「そう、それだ」

本来ならばかなり調べないとわからない話だ。しかし彼はすぐにそれを知った。これがトールにはいささか不思議であったのだ。それで今このことを問うているのだ。

「どうして知っていたのだ？」

「ああ、それか」

トールのその問いに対して。ロキはいつもの様にしれつとして答えてきた。

「わしの耳はいいのだ」

「御前の耳はか」

「そうだ。だからわかつたんだよ」

「これまた平然と嘘をついていた。」

「それだけさ。これでいいかい？」

「ううむ」

何か引つ掛かるものを感じたのは事実だった。しかしトールは元来こうした嘘とかに弱くロキは嘘の達人だ。勝負は最初からわかつていた。

「まあいいか」

「そういうことだ。それではな」

「帰るとするか」

「我等のヴァルホルにな」

最後はうやむやにされてしまった。だがミヨツルニルは無事トールの手に戻り巨人達は倒された。トールにとっては満足のいく結果だったのでそれでよかったのだ。その前にはロキの疑惑は些細なことであった。

雷神の女装

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9849e/>

雷神の女装

2010年10月8日15時04分発行